

重要カレイ類の資源評価と管理技術に関する研究

(資源評価調査)

寺門弘悦

1. 目的

本県底びき網漁業の重要な漁獲対象であるムシガレイ、ソウハチ、アカガレイおよびヤナギムシガレイの4種を重要カレイ類とし、それらの資源状況について科学的評価を行うとともに、資源の適切な保全と合理的かつ持続的利用を図るための提言を行うことを目的とする。

2. 方法

漁獲統計資料は島根県漁獲管理情報処理システムにより抽出し、魚種別銘柄別漁獲量の集計を行った。また、産地市場での漁獲物の体長測定を実施し、調査当日の漁獲物の体長組成を推定するとともに、適宜、漁獲物を買取り、精密測定を実施した。さらに、これらの調査結果をもとに(国研)水産研究・教育機構 水産資源研究所(以下、水産機構水資研)および関係府県の水産研究機関と協力し、魚種別の資源評価を行った。

3. 結果

(1) 重要カレイ類の漁獲状況調査

重要カレイ類について、漁業種類別漁獲量を集計した。ムシガレイおよびソウハチについては浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業(2そうびき)(以下、沖底)で漁獲された銘柄別漁獲量を集計した。

(2) 生物情報収集調査

2022年漁期中に浜田市場において、沖底で漁獲されたムシガレイおよびソウハチの市場調査をそれぞれ5回および3回実施した(うちムシガレイは2回、ソウハチは1回の精密測定も実施)。また、大田市場において、小型底びき網漁業(以下、小底)で漁獲されたアカガレイの市場調査を2回実施した(うち1回は精密測定も実施)。

浜田、恵曇漁港を基地とする沖底における重要カレイ類の1統当たり漁獲量の推移を図1に示した(恵曇船の廃業により2019年漁期以降は浜田船のみ)。2022年漁期の漁獲量は、ソウハチが84トン、ムシガレイが106トン、ヤナギムシガレイが37トンであった。また1統当たり漁獲量は、ソウハチが24トン、ムシガレイが30トン、ヤナギムシガレイが11トンであり、平年比(2012年~2021年の過去

10年)ではソウハチおよびムシガレイは58%、ヤナギムシガレイは88%であった。

アカガレイのみ別に沖底と小底による1統(隻)当たり漁獲量の推移を図2に示した。恵曇船の廃業により沖底では本種の漁獲がほとんどなくなったため、小底の漁獲動向と併記している。小底による漁獲は2008年頃から増加傾向にあり、2022年の1隻当たり漁獲量は4.2トンであり、平年比は68%であった。

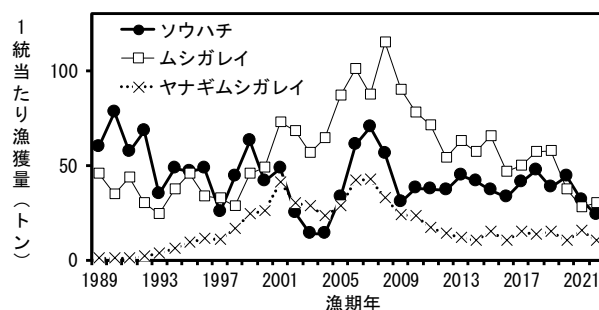


図1 浜田・恵曇漁港を基地とする沖合底びき網漁業(2そうびき)で漁獲された重要カレイ類の漁獲動向(2019年漁期以降は浜田船のみ)

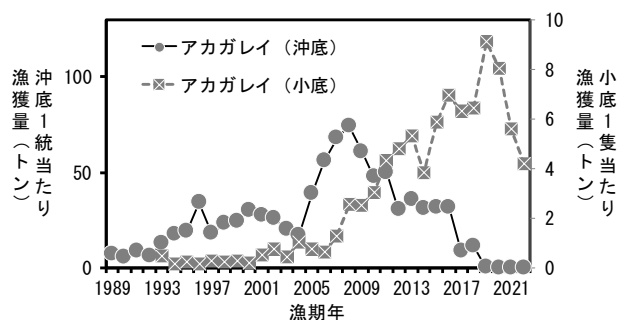


図2 沖合底びき網漁業(2そうびき)および小型底びき網漁業で漁獲されたアカガレイの漁獲動向

4. 成果

調査結果は水産機構水資研に送付し、重要カレイ類の日本海系群の資源評価に活用された。また、水産機構水資研が開催するブロック資源評価会議において資源管理方策の提言が行われた。